

婚姻状態・子どもの有無別にみた社会関係資本のニーズと格差

Needs and Disparity of Social Capital depending on Marital and Child Status

喜 多 加実代

Kamiyo KITA

社会科教育ユニット

(令和3年9月30日受付, 令和3年12月23日受理)

1. はじめに

本稿は, 社会関係のあり方について, 婚姻状況と子どもの有無別に検討し, ソーシャル・サポートのニーズとして考察することを目的とする。分析の中心は, 2014年に石川由香里・杉原名穂子・喜多加実代・中西祐子が実施した, 30~59歳女性に対する調査(1226票)⁽¹⁾(石川他 2018), 及び2019年に喜多・石川・杉原・中西が実施したインタビュー調査⁽²⁾になるが, 2006年, 2015~16年に石川他で実施したインタビュー調査(石川他 2011; 喜多 2012)も利用する。

この考察には, 先行研究との関係で複数の意図がある。

1つ目は, 様々な不利や格差が指摘されるひとり親家庭に対する課題である。ふたり親家庭と比べてひとり親家庭で子どもに対する関わりが少なく, また学業達成でも子どもが不利になりがちであること, 更にひとり親が社会関係からも疎外されがちであることは既に多くの研究で指摘されている。社会的排除の観点からひとり親家庭の不利を捉える必要性も言われている。その指摘には大いに首肯しつつも, 本稿では, ひとり親家庭はむしろ社会関係を結ぶことに積極的と思われる面もあること, 社会関係やサポートのニーズがあるのにその充足が十分と言えず, ふたり親と格差があることが課題であることを指摘したい。

2つ目は, ひとり親家庭の社会的な不利やふたり親との社会関係資本における格差を注視しつつも, 子どものいない未婚者や離死別独身者, 子どものいない既婚者と比較することで, それをニーズとして見ることである。子どものいる場合には, 端的には子育てサポートのニーズから社会関

係は増えることが指摘できる。また子どもに関する社会関係資本面での不利は, 常勤の仕事をもつ母親や単身赴任家庭の母親と共通の課題もある。他方, ひとり親家庭は, 子どものいない未婚者や離死別者と, おそらく経済的問題を共有する部分もある。ありうる困難について複数のラインが引け, そこに連続性と共に格差があることを指摘したい。

3つ目は, 社会関係資本の多寡と種別に関わる課題である。社会関係資本のあり方については, ジェンダーの視点からR. パットナムの論に対する批判が出ていた。パットナムが, 従来は女性達が社会関係資本の蓄積と維持に特に貢献していたと述べたことに対し(Putnam 2000=2006), B. O'NeillとE. Gidengilの編著は, 女性が多く関わる社会関係が政治参画に結びつくようなものでなく, ケアに関わる従来女性役割に関わるものが多く, また彼女達自身の利益になるものでないことを指摘した(O'Neill & Gidengil 2006; 山崎 2007:61-9; 杉原 2018)。O'Neill & Gidengil (2006)のこの問題提起は, グラノヴェーターの見解にも接合可能であるように思われる。コールマンなどの社会関係資本研究が, 緊密な関わりをもち関係者全てが知り合いである閉じた関係の重要性と有効性を指摘するのに対し(Coleman 1988=2006), グラノヴェーターは「弱い紐帯の強さ」として関わりが頻繁ではない緩やかな関係性が, 社会的地位上昇に有効であると述べる(Granovetter 1973=2006)。更に後には, それぞれには機能の違いがあり, 相互扶助や情緒的安定には前者が, 有利な職業取得などには後者が有効であったとした(大岡 2007:156-7)。子どものいる女性が必要と

表1 世帯年収 (単位:万円)

	N	平均
未婚無子	152	432.83
離死別無子	24	373.75
既婚無子	116	663.53
既婚有子	772	672.85
ひとり親	104	380.96
合計	1168	608.55

p<.001

表2 婚姻・子ども有無別 就業形態

	N	正規就業	パート派遣	自営内職	非就業
未婚無子	177	57.6%	23.7%	5.1%	13.6%
離死別無子	22	40.9%	40.9%	0%	18.2%
既婚無子	114	34.2%	25.4%	7.9%	32.5%
既婚有子	789	19.9%	38.0%	5.3%	36.8%
ひとり親	115	41.7%	44.3%	3.5%	10.4%

χ^2 検定 p<.001

表3 婚姻・子ども有無別最終学歴

	N	中学校	高校	専門学校 (高卒後)	短大・ 高専	大学	大学院
未婚無子	180	3.9%	25.6%	17.8%	20.0%	29.4%	3.3%
離死別無子	25	12.0%	28.0%	8.0%	16.0%	32.0%	4.0%
既婚無子	117	0.9%	24.8%	16.2%	24.8%	28.2%	5.1%
既婚有子	794	2.1%	34.0%	14.4%	26.4%	21.4%	1.6%
ひとり親	115	3.5%	44.3%	18.3%	20.9%	12.2%	0.9%

χ^2 検定 p<.001

し実際に多く有するのは、前者の社会関係資本と言えまいか。両者は異なる面があり、グラノヴェターは社会経済的に有利な層で社会的地位獲得に重要な社会関係を見ていたと想定される。とすれば、1つ目とはむしろ逆方向の論点にもなりうるが、子育てにニーズのある社会関係や支援をニーズとして捉え供給するとともに、母親や子どものために、社会的地位獲得のための社会関係の獲得も目指される必要があるということである。

2. 婚姻状況と子どもの有無別にみた調査対象者の特性

ひとり親家庭の困難や不利な状況については、神原 (2007; 2020)、赤石 (2014)、労働政策研究・研修機構 (2019) などに全国調査を用いてその傾向がまとめられ、赤石の著作では、当事者の声もそこに関連づけられ具体性を与えられている。世帯収入や賃金の低さ、非正規雇用者の多さ、相対的に学歴が低い傾向が指摘されている。我々が実施した2014年調査 (以下、2014年調査と記す) についてカテゴリー別の属性を示すが、これは調査回答者の属性を明示し全国調査と同様の傾向がある、すなわち調査回答が母集団の傾向と同様と考えられることを確認するためである。

比較カテゴリーとして、未婚無子、離死別無子、既婚無子、既婚有子 (=ふたり親)、ひとり親 (=離死別未婚有子) に分けた。そのためひとり親には未婚有子回答者が含まれるが、2014年調査対象者ではひとり親のなかで未婚有子はわずかでほぼ離死別有子である。ふたり親とひとり親

が文字的に似ていてわかりにくいことと、「ふたり親」とすると父母両方を想定しやすいが2014年調査の回答者は女性のみであることから、以下ではカテゴリーとして「既婚有子」と「ひとり親」と記載する。30～59歳 (回答時点での60歳が含まれる) 女性を対象にした調査ではあるが、子どものいない未婚者と既婚者はやはり相対的に若くなっており、平均年齢は、それぞれ未婚無子42.0歳、離死別無子45.4歳、既婚無子44.0歳、既婚有子46.5歳、ひとり親49.1歳であった。調査回答者についての、世帯年収、就業状況、最終学歴はそれぞれ表1～3の通りである。

ひとり親の非正規就業者は正規就業者より多いが、安田尚道・塚本成美の指摘通り、実は未婚無子者に次いで正規就業者が多くなっている (安田・塚本 2009)。

3. 社会的排除と社会関係: インタビューの事例から

ひとり親については、社会的排除という観点も注目されている。ひとり親研究でその観点の重要性を指摘した神原文子の言う社会的排除は、「経済的・社会的・政治的・文化的諸権利の不充足・否定・アクセス困難な状況におかれること」 (神原 2007: 20) というものである。安田・塚本は社会的排除に社会関係を含めて考える意義を次のように述べている。「社会関係はもっとも新しい貧困研究のなかで注目されるようになってきた要素であり、人びとが排除されるのを防いだり社会的に包摂するために不可欠である。(中略) 現代で

は地域社会におけるさまざまな階層や社会集団、ネットワークあるいは市民的組織による組織的な共助と社会的包摂の意義が認められている。」「構成的排除と道具的排除の両方の性格をもつ社会関係からの排除は重要である。社会関係は、個人的交流や心理的支援ばかりではなく雇用機会や育児、経済援助に関する情報の提供などを確保するためにも必要である」(安田・塚本 2009: 84)。また子どもの教育についても社会関係資本が影響する可能性が示唆されるなか(Coleman 1988=2006; 平塚 2006; 志水 2014; 石川他 2018)、安田・塚本の指摘は非常に重要なものであろう。

まず2019年に実施したインタビュー調査のうち、離別者3名と未婚ひとり親1名の4事例について、社会関係的に不利な状況が重なったパターンと、また逆に不利な状況をカバーする支援が得られたパターンを検討する。同調査は、東京、福岡、長崎の3地域で、行政の福祉窓口、子育て支援センター、女性センターで回答協力者を募集し、37名から子育てと社会関係の状況を聞いた。このうち、離別ひとり親2名、未婚ひとり親1名、離別後再婚して子どもがいる回答者2名であった。再婚して子どもがいる1名は、インタビューの後で離婚歴があったことを告げ、家庭内性別分業、特に回答者の仕事に対する理解と協力の欠如が離婚原因にあったことだけを簡単に述べたが、離婚の影響については語っていないため、とりあげるのは4名である。しかし、その回答者が再婚出産後も就業を続け仕事にも熱心である状況を鑑みると、この後に検討するDさん同様、就業環境が回答者を不利な状況に追い込まなかったことが想定される。同調査では、回答協力者から別の協力者に声がけしてもらうこともあり、部分的にはスノーボール・サンプリング的になっているが、ここで取り上げる4名は相互に知らない者同士である。

(1) Aさん：社会関係からの複数の疎外

離婚とひとり親になったことによる社会関係からの複数の疎外経験を語ったのがAさんである(2019年インタビュー時、48歳。以下同様に年齢を記載する)。

Aさんは、高校を卒業後に就職、社内恋愛で結婚し専業主婦になった。しかし、夫が精神的に非常に不安定になったことと夫の子どもに対する虐待に気づき、3人目の子どもが3ヶ月の時に離婚した。しかし、経済・就業面での両親の苦労を知っており、夫の不安定な状態について既に心配

をかけたと考えていたAさんは、離婚後実家に身を寄せながらも父親にはその事実を話せなかったという。父親には、夫が仕事で遠方に行ったので実家で暮らすという体を取り、母親には事実話しても「迷惑かけたくない」と相談まではしなかったそうである。また、行政も支援先にならなかった。「離婚して仕事がなかった、つらかったって市役所にも相談行ったら体を張ってでも何とかしたらどうなのみたいな言い方だったんです。(中略) 忘れもしないんですけど、保育園もなくお金もなく市役所に行ったら、まだ母子家庭っていうのもそんなに受け入れられてない(中略) 今でこそ多いんですけど3人で [=子どもが3人もいて] なんて離婚したのって言われて。なんにも考えてない、ただ自分のわがままじゃないのっていう見方だったんですね。だから市役所行って助けてくれる人がいないんだ、今から1人でやっていかないといけないんだって思っ」たとのことである。

事実を語らない中でも、実家では父親も状況を察してAさんを慮り、母親には就業中の子どもの面倒も見てもらうことはできたが「赤ちゃんは泣くし上の子は夜泣きするしで3人も連れて帰ってきて私は仕事に出掛けるじゃないですか。だからだんだん家族関係がぎくしゃくしてきて」、近くの市営住宅に引っ越すことで、逆により関係に戻ったとのことである。

Aさんは、「私はホームパーティーとかが好きで皆さん呼んで賄って」自分と夫の職場の人たちと結婚後も交流していたほどであったが、元夫とつながる人脈と関係をもつのが辛くなり「連絡を取らなくなっちゃって、孤独」だったと述べた。母子連合会とつながったことで辛い本音を共感的に聞いてもらえ、また手当をもらう手続きの情報などもそこから得たという。

その後、子どもの教育面でも、Aさんは関係からの排除や格差を経験している。

長男が野球が好きで野球クラブに入りたいとか言って、そのとき朝の5時とかから試合があるから5時集合とか5時半集合とかなかなか起きれないんですよ、夜仕事してたので。それで何回か遅刻してそこのお母さんたちに責められて。やめてくださいって言われて、子どもはやめたくないですよ。だけどお願いだからやめてくれなくなると他のお母さん、その頃少年野球ってのはお茶当番とかあってとっても冷たい目だったですね。こんなこと言ったらあれです

けど皆さん家庭があってご主人がいて、持ち寄ってお菓子とかも。うちはなかなか買えなかったんで。そういうのもあってやめさせました、かわいそうだったけど。

Aさんは、当時、パートで飲食店・介護職・水商売のダブル、トリプル・ワークで長時間就業し、かつ経済的にも豊かではなかった。子どものクラブへの親の関与が、Aさんに排他的に機能し、子どものやりたいことを阻む形で働いたのである。一方、末子長女には、高校時代はかなり高額の留学をさせることができ、それを活かした大学進学をさせることもできた。しかし、留学助成金を得る過程でもAさんは差別的・排他的な経験をしている。

[県の補助金説明会において] こういう手続きはもしかしたら市のほうでもやってるかもしれないので聞いてくださいって言われたので聞きに行ったんです。母子家庭でこういう状態で娘が行きたいって言うんですけど補助金が出る制度ありますかって言ったら市はないって言われて。そもそも留学っていうのはお金持ちのどうのこうのってやっぱり言われるんですね。古いんですよ、考え方が。すごく腹が立ちました。お金持ちじゃない子は勉強しなきゃいけないの？って、自分が大きくなって返済してもいいから行きたいって言う子に、要は芽を摘むようなもんじゃないですか。

(2) Bさん：家族のサポートと友人の家族の多様さ

2例目のBさん(53歳)は、1人目の夫と離婚して、再婚した現在の夫と養子縁組みした息子を育てている。インタビューでは再婚後の苦労や子育ての話が中心になったこともあり、Bさんについては短いまとめとなるが、Aさんとやや類似する面と異なる面がある事例である。

Bさんは短大で染色を専攻し卒業後に関連の仕事に就いたが、身体を患って何回か仕事をアパイルバイト的な短時間の仕事をしていた時に結婚した。しかし、結婚後まもなく夫が妄想を伴う精神疾患を発症し、夫は仕事を辞めて言動もおかしくなり生活が立ちゆかなくなってきたそうである。その際、Bさんは助けを求めて実家に戻った。Aさんと異なるのが、両親が状況を知ってBさんのために動いたことである。「日頃何も無関心のような感じだったんですけど、父がいっぱい、一番、

積極的に、困らないようにということで弁護士、知り合いの方に頼んでくれたりとか、準備してくれた」という。父親に弁護士の知り合いがいたことが周眼的にBさんを支えることになったかもしれない。

両親以外で情緒的に支えになったのは、高校や短大時代の友達であったと回答し、友人については、「家庭の状況も複雑な子もいるので、そういう子にはむしろ話せる」と語り、友人の家族の多様性が話しやすさにつながったことが示唆された。

(3) Cさん：「みんなで育てる」ことの希求

3例目のCさん(22歳)は未婚のシングルマザーであり、学生時代の友人や子どもの母親同士の交流についてはやや乏しさを感じる一方、親からの支援を強く感じている。Cさんは就職をひかえた短大卒業直前に妊娠がわかったが、相手も相手家族も出産に反対したためシングルマザーになることを決意した。Cさんは、地元から離れて進学し就職もその地とする予定であったが、就職を辞退して実家に戻った。同世代の友人とは異なる生活であったり、遠方になったために「連絡を取る頻度も減っていくのかなと思って。(中略)ちょっとそこが寂しい」と言い、また保育所でも同世代の母親がいなくてそこまで交流がないことを語った。地元の旧来の友人には、子どもがいることを隠しているわけではないが「公式に打ち明けてはなし」そうで、それは相手との交渉で間に入った弁護士にあまり話さないよう勧められたためもあるという。Bさんの場合に似て、Cさんの場合も父親が弁護士を依頼したとのことであった。

就業、友人、子どもの母親同士の関係において不利な状況に置かれていると言えようが、Cさんの場合は、それまで母親との関係が悪かったにもかかわらず、出産を機に関係が改善し子育てでも大いに助けられたという。出産を悩んだCさんが母親に連絡を取った際、Cさんの母親は誰よりも頼れる存在になった。

「こっちは大丈夫だから」って言われて。(中略)「いろんな家庭があるから、父親がいなくても、みんなで育てていこう」って。「みんなで育てていこう」ってというのは、一番最初に言われました。(中略)味方になってくれるとは思わなかったんですけどね、その電話。(中略)母親との関係も悪くって、私が出て行ったみた

いな感じだったので、短大の〔進学時に〕。私と母の関係がよくなっていったのは、この子を妊娠して出産してからなので、そこがこの子が教えてくれたのかなってちょっと思いますね。

過去の友人との関係が疎遠になっていることを「ちょっと……寂しい」と語り、子どもを通じた母親の繋がりを作りにくいと確かに言っているものの、Cさんが困難な事態として語ったのは、子どもがアレルギーで入院し、2時間おきの授乳のために眠れないまま子どもにつきっきりになった時のことである。「本当に寝れないと思って。もうずっと、うつっぽい感じで。だから、もうどうしようもないから、〔Cさんの母親に〕『仕事探さない』って言われたんですね。つまり、ひとり親という属性以上に、病気の子どもに掛かりきりにならざるを得ない母親という、既婚の専業主婦とも通底する、社会関係の不足が問題であったと言える。そこに仕事という、子どもと離れる機会や外との関わりを提案したのも、Cさんの母親であった。

そんなCさんが、社会関係において、おそらく友人関係以上に困惑し不満に思っているのは「みんなで育てる」というCさんの家庭の子育てスタイルやニーズを社会が阻むことであろう。

入院のときに（中略）母親が親であるべきっていうのが、すごいもう、私に関わってきた人の中でほぼ思ってるんだらうなっていう。母親だけじゃないと思うんですね、親になれるのは。（中略）他の人だって助けられるし、〔病院に〕泊まってもいいっていう許可は出せると思うし。だから父親でも、おばあちゃんでも、誰でも母親の役割はできると思うんですね。逆に父親の役割もできると思うんですけど。（中略）〔Cさんは疲労困憊であったので病院の泊まりを〕うちの母に頼んだときも、看護師さんとかお医者さんとかも、「え、お母さんがいないんですか」みたいな感じで言ってきたから。

〔保育所も〕「面談のときは、お母さんがいい」って言ったりとか。お母さんじゃなくても、おばあちゃんがよく分かるところがあれば（中略）2人から聞いてもいいだろうって思うんですね。（中略）それなりに不満はあります。我慢をしてるんですけど。

「お父さんいないのはすごく大変だよ」と言われたりとか。それはわかってますと思うんです。自分が一番わかってこの決断をしたんです

と思うんですね。（中略）難しいっていう言葉だけ掛けるのはちょっとって思うんですね。（中略）助けてくれる人がいたら、みんなで愛情注げばいいんじゃないっていう、うちの母とも考えて、そういうふうだと思うんですね。

「お父さんいないのはすごく大変だよ」に対するCさんの異義は、母子家庭やひとり親への偏見を批判したものとも取りうるが、その前の発言を踏まえるとCさんにとってより深刻なのは、父母が揃う性別分業的・核家族的な子育てが標準化され、子育ての多様な関わりが実現されない状況と思われる。その状況をそのままに、Cさん本人がそれを知らないかのように声がけをする事態をCさんは批判しているように思えるのである。

(4) Dさん：複数の関係からの支援

上述の三者とは対照的に、離婚の影響を感じさせない回答をしたのがDさん（49歳）である。特にAさんが、様々な排除や困難に直面しているのに対し、Dさんは、家族、親族、地縁、友人、加えて就業環境のよさといった条件が重なって困難を回避させた事例とも考えられる。「一番親しいのは短大の時の友達」「あとは職場の同い年ぐらいの子」と言うDさんは、ずっと地元で生活し、周囲に子どもの頃からの友人も多くいる環境である。

また、地縁が強い地域であったことがDさんの子育てにもサポートになったと次のように述べた。「外から入ってくる人には多分、厳しいとは思いますが、私はそれが子どもの時から慣れているので、逆にそういう環境、特にひとり親になってからはすごく助けられました」。

Dさんは正規の安定した職業に就いており、現在は管理職にもなっている。職場の制度やサポート体制が整っていたことも、Dさんが就業を続けられ、子育てとの葛藤を少なくしたことが窺える。子どもが大病をした際、その仕事を辞めることを覚悟したというが、その時は「子どもの介護休暇の制度がしっかりしてたので、そこは辞めずに、上司も理解してくださって続けることができ」たという。「仕事をずっと続けたい、離婚に関係なく続けたいと思ってたし、離婚してからも絶対辞めるわけにはいかなかったの、保育園も地元の保育園だったんですけど、私が朝も早く夜も遅かったのでもちろん送り迎えをして、それも母がちょっと具合が悪くなったりする

と、〔その近隣の〕皆さんで助けてくれてお迎えに行ってくれる」と、勤務時間上厳しくはあったが、母親の支援に加えて地縁の結びつきが、Dさんの仕事と子育ての両立を支えた形である。更に「職場の同い年ぐらい」の同僚が、仕事の悩みも子どものことも話せる相談相手にもなっており、社会関係的にも好循環になったと言える。親戚も近くに住み、関係が親密で、現在は母親が亡くなり子どもが進学して一人暮らしになったDさんを心配し「今日何々作ったから仕事帰りに取りにおいで」と時々声をかけてくれるという。

「このインタビューのお話を頂いてから、そういうのとかもいろいろ考えたんですけど、結局私じゃないんですよ、育てたのは。(中略)本当に皆さんに育ててもらったっていう、だから良かったのかなって思います。」とまでDさんは述べている。社会関係資本の豊かさが、上述のCさんが望むような子育てを実現させているようですらある。

そんなDさんであるが、その一方で次の語りからは、Dさんが、女性の子育て責任や仕事におけるいわゆる男並みの働き方の規範を受け入れ頑張ってきたこと、Dさんの母親の支援がなければ仕事と子育ての両立が困難だったかもしれないことを示唆する。

私たちの時代は、そういう母たちの助けもありましたけど旦那さんの助けってそうなかったじゃないですか。「助けて」って言うのって、旦那じゃなくて母だったじゃないですか、それが今の子たちは実家じゃなくて旦那さんですよ。(中略)母たちがいないと困ってるんですけど、母たちがいなくても実家の力がなくても、旦那さんがいるからやっていけてるっていうか、若い子たちが。(中略)子どもが熱を出したので、男の子たちが「休みます」とかって、「帰らないといけません」「保育園のお迎えに行かないといけません」って普通に言うので、「明日、授業参観なので」とか、えっ、お父さんが授業参観？みたいに思うんですけど言えないじゃないですか。(中略)夫婦で子育てしてるっていうのは、それは私たちの時代よりはいいことだと思います。

父親が不在でも「皆さんに育ててもらった」というDさんが、職場や周囲が変わるなかで、自らの子育てに関わる性別分業的規範に気づかされ、子育てに対する男性・父親の関与とそれが可

能な働き方を望ましい方向として述べているとも言えよう。

4. 既婚有子とひとり親回答者の比較

AさんからDさんの事例は、それぞれの家庭の事情やたまたまの状況を反映した、個別性の高いものにも見えようし、実際その面もあるかもしれない。しかし、本節では我々が実施した2014年調査から、社会関係の豊かさが、一方では世帯収入と、他方では就業形態と結びつく傾向があり、家庭単位として見れば高収入の性別分業家庭に有利に、女性個人の単位で見れば就業が社会関係資本を増す傾向があるという逆の方向性を指摘する。Aさんの被った不利と、Dさんが不利な状況に陥らなかったことはここに位置づけられるようにも思われるのである。

2014年調査では、社会関係について、回答者が加入している組織や団体、活動参加状況、地域の知り合い、個人の相談先や相談頻度とともに、子どものいる回答者に、子育てや教育に関する情報を聞いた相手、子育ての悩みを相談する(した)相手、子どもを預かってもらう(もらった)相手、加えて子どもとの関わりについて尋ねた。

以下では、これらを点数化しその平均値について、まず既婚有子とひとり親で比較する。

社会活動への参加については、因子分析を行ったところ表4に示す因子が見いだされたため、これについては各因子得点の比較を行っている。

表4 社会活動に関する因子分析(主因子法)

	社会活動 因子	政治参 加因子	地域行事 活動因子
近隣の学校支援活動	.030	.074	.454
地域の祭りやバザーなどの地域行事	.228	.057	.543
募金	.703	.042	.141
請願書への署名	.584	.248	.127
選挙、政治、社会問題についての集会への出席	.106	.729	.145
デモなどの抗議活動	.087	.428	.028

既婚有子とひとり親でこれら社会関係や活動の度合いを比較したものが表5であり、確かにある程度差があるようにも見える。子育ての相談先と子どもを見てもらう相手については、そもそもの質問項目に「夫」「夫の親」が入っており、また実態としても夫がそうした相手になっているためかなり差が生じている。それ以外の相手では有意

表5 既婚有子とひとり親の社会関係・社会活動状況

		N	平均値	標準偏差
自治会・PTA活動参加度 (1)*	既婚有子	646	2.10	1.93
	ひとり親	96	1.66	1.60
団体・組織加入数(2) ***	既婚有子	794	1.63	1.15
	ひとり親	115	1.23	1.05
地縁の強さ(知り合い数 と度合い) (3) n.s.	既婚有子	781	4.85	2.51
	ひとり親	113	4.63	2.63
社会活動因子得点 n.s.	既婚有子	767	0.05	0.76
	ひとり親	109	0.09	0.71
政治参加因子得点 n.s.	既婚有子	767	-0.04	0.65
	ひとり親	109	0.00	0.72
地域行事活動因子得点 *	既婚有子	767	0.14	0.69
	ひとり親	109	-0.02	0.68
個人的相談先多さと頻度 (4) +	既婚有子	755	9.16	4.23
	ひとり親	110	8.45	3.76
個人相談先単純計(5) n.s.	既婚有子	794	3.31	1.72
	ひとり親	115	3.11	1.65
個人相談先職場以外 *	既婚有子	794	2.84	1.56
	ひとり親	115	2.49	1.48
子どもを通わせる園や学 校情報計(6) n.s.	既婚有子	794	2.94	1.74
	ひとり親	115	2.77	1.78
習いごと情報計(7)*	既婚有子	794	2.09	1.29
	ひとり親	115	1.81	1.24
子どもの進路や職業情報 計 n.s.	既婚有子	794	2.13	1.45
	ひとり親	115	2.07	1.43
子育て相談先計(8) ***	既婚有子	794	3.28	1.67
	ひとり親	115	2.68	1.55
子ども預け先計(9)***	既婚有子	794	2.39	1.23
	ひとり親	115	1.81	1.13
子育て相談先夫・義両親 以外計(10) n.s.	既婚有子	794	2.23	1.41
	ひとり親	115	2.26	1.45
子ども預け先夫・義両親 以外計 n.s.	既婚有子	794	1.34	0.93
	ひとり親	115	1.41	0.86
子どもを通じた友人への情 報・相談等計(11)**	既婚有子	794	2.67	1.59
	ひとり親	115	2.20	1.62
子どもの勉強をみる(み た) (12) *	既婚有子	767	2.79	0.90
	ひとり親	108	2.58	0.86
子どもの友人関係につい てよく知っている n.s.	既婚有子	765	3.14	0.75
	ひとり親	109	3.10	0.69

有意確率 +p<0.1, *p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

(1) 自治会, PTA, 趣味・スポーツ, ボランティア活動の頻度の合成変数。点数が高い方が社会関係が多く活動頻度が高いことを示す。点数についてはこの下も同様。

(2) 団体・組織(自治会, PTA, 趣味・スポーツの集まり, 生協, 労働組合等)加入の数。

(3) 地縁的な関係(町内会長, 民生委員, 近隣商店の人, 近隣住人)でのつき合いの程度の合成変数。

(4) 家族, 親戚, 職場の人, 子どもを通じた友人, 近所の人などについてそれぞれの程度個人的な相談をしたかを合成したものの。

(5) 上の(4)と同じ質問について頻度を考慮せず相手の数を合計したものの。

(6) 家族, 親戚, 職場の人, 子どもを通じた友人, 近所の人などについて, 子どもの学校や保育園・幼稚園の情報収集をした数を合計したものの。

(7) 上の(6)と同様の選択肢で, 子どもの習い事について情報収集した相手の数を合計したものの。この下の子どもの進路や職業の情報収集も同様。

(8) 夫, 自分の親, 義両親, 専門家やサービス機関, 子どもを通じた友人などについて, 子育てで悩んだ時に相談した相手の数を合計したものの。

(9) 上の(8)と同様の選択肢で, 幼少期の子どもの面倒が見られない際に預けた相手の数を合計したものの。

(10) 上の(8)の選択肢から, 夫と義両親を除いた選択肢での合計。この下の子どもの預け先も同様。

(11) この上の(6)からの子ども関連の情報収集・相談・預け先で, 「子どもを通じた友人」をあげた数を合計したものの。

(12) 回答者自身が子どもの勉強をみる(過去にみた)かどうかの質問に, 「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」をそれぞれ4~1点として平均を算定。この下の「子どもの友人関係についてよく知っている」も同様に算定。

差が見られないが, 他の家族や他の相手が補完的役割を果たすまでには至っていないとも言える。他方, 個人相談先には「家族」の項目が含まれており, 頻度まで含めると夫のいる既婚有子が高くになっているものの, 「よく相談した」「ときどき相談した」を相談先があるものとして単純に計算した場合は有意差は生じていない。夫以外の者が相談先として補完的に働いているとも考えられる。

子どもに関連の情報収集についてはあまり差がみられないが, Aさんの事例からも懸念される「子どもを通じた友人」いわゆるママ友とのつき合いを見るために, 「子どもを通じた友人」に情報収集や相談をした回答を合計して比較した。ここでは差が生じており, 母親同士の交流が弱くなる可能性がある。しかし, これらの差は経済格差や母親の就業形態からも影響を受ける可能性が想定され, 5ではそれを検討する。

5. 世帯年収と母親の就業形態の影響

表6は子どものいる回答者全体について世帯年収別に同じ項目を比較したものである。既婚有子とひとり親の比較では有意差のない項目も含めて, 社会関係の豊かさがむしろ世帯収入と関連することが見て取れる。表5に見られた差の一部は, ふたり親世帯とひとり親世帯の経済格差を反映するものと想定することが可能である。

そして, 子どものいる女性について就業状況別に比較した表7からはまた少し別の様相が見える。子ども関連の社会関係にはあまり差は見られず, また正規就業者と専業主婦であり差がない項目もあるが, 地域に関わる社会関係や活動のいくつかで, また特に子どもを通じた友人との関係が正規就業者で弱くなっている。

これらの比較から, 経済的ゆとりがあり, かつ家庭を優先できる人がいることが, 地域に関わる社会関係や活動, 子ども関連の社会関係資本を多く有する傾向があると想定できる。先に述べたように, 高収入の性別分業的家庭が優位になる現状があるということである。Aさんは, 就業形態こそパートであったが相当に長時間労働で, かつ経済的ゆとりがないことが両方の面で不利に働いたと考えられる。他方, Dさんは正規就業者であったが, それは母子家庭であっても経済的ゆとりにつながり, またDさんの母親が子育ての支援をしてくれており, 更に地縁関係の豊かな地域で育ったその社会関係資本をそのまま受け取る条件に恵まれたと考えることができる。

Aさんの子どもが部活を辞めた話とかなり類似

表6 世帯年収別社会関係・社会活動状況
(子どものいる回答者の比較)

		N	平均	標準偏差
自治会・PTA等活動参加度*	年収低群	187	1.81	1.68
	年収中群	175	1.98	2.08
	年収高群	357	2.24	1.88
団体・組織加入数***	年収低群	234	1.30	0.98
	年収中群	221	1.57	1.18
	年収高群	423	1.75	1.18
地縁の強さ(知り合い数と度合い)*	年収低群	227	5.20	2.64
	年収中群	219	4.84	2.61
	年収高群	417	4.64	2.40
社会活動因子 n.s.	年収低群	219	-0.06	0.80
	年収中群	214	-0.01	0.77
	年収高群	414	0.05	0.75
政治参加因子 n.s.	年収低群	219	-0.04	0.61
	年収中群	214	-0.04	0.63
	年収高群	414	0.03	0.88
地域行事活動因子 n.s.	年収低群	219	-0.06	0.63
	年収中群	214	-0.01	0.64
	年収高群	414	0.05	0.64
個人的相談先多さと頻度**	年収低群	220	8.28	4.35
	年収中群	212	9.06	4.25
	年収高群	405	9.56	4.03
個人相談先単純計**	年収低群	234	2.98	1.76
	年収中群	221	3.29	1.69
	年収高群	423	3.48	1.68
個人相談先職場以外***	年収低群	234	2.48	1.56
	年収中群	221	2.87	1.52
	年収高群	423	2.96	1.55
子どもを通わせる園や学校情報計 n.s.	年収低群	234	2.75	1.80
	年収中群	221	2.91	1.66
	年収高群	423	2.99	1.71
習いごと情報計***	年収低群	234	1.81	1.26
	年収中群	221	2.07	1.19
	年収高群	423	2.20	1.31
進路や職業情報計*	年収低群	234	1.91	1.40
	年収中群	221	2.09	1.45
	年収高群	423	2.25	1.44
子育て相談先計**	年収低群	234	2.90	1.59
	年収中群	221	3.26	1.69
	年収高群	423	3.34	1.65
子ども預け先計***	年収低群	234	1.96	1.22
	年収中群	221	2.30	1.14
	年収高群	423	2.51	1.23
子どもを通じた友人への情報・相談等計***	年収低群	234	2.24	1.60
	年収中群	221	2.74	1.50
	年収高群	423	2.77	1.62
子どもの勉強をみる(みた)**	年収低群	220	2.60	0.90
	年収中群	215	2.75	0.94
	年収高群	412	2.86	0.88
子どもの友人関係についてよく知っている**	年収低群	220	3.00	0.79
	年収中群	214	3.19	0.76
	年収高群	411	3.20	0.70

有意確率 + p<0.1, * p<0.05, ** p<0.01, ***p<0.001

表7 就業形態別 社会関係・社会活動状況
(子どものいる回答者の比較)

		N	平均	標準偏差
自治会・PTA等活動参加度*	正規就業	173	1.74	1.83
	パート派遣	320	2.14	1.91
	専業主婦	247	2.15	1.91
団体・組織加入数 n.s.	正規就業	205	1.54	1.23
	パート派遣	398	1.64	1.09
	専業主婦	303	1.52	1.15
地縁の強さ(知り合い数と度合い)+	正規就業	201	4.45	2.40
	パート派遣	391	4.96	2.65
	専業主婦	299	4.91	2.43
社会活動因子+	正規就業	197	0.17	0.77
	パート派遣	384	0.04	0.74
	専業主婦	292	0.00	0.75
政治参加因子***	正規就業	197	0.10	0.88
	パート派遣	384	-0.02	0.64
	専業主婦	292	-0.14	0.46
地域行事活動因子 n.s.	正規就業	197	0.05	0.67
	パート派遣	384	0.18	0.70
	専業主婦	292	0.10	0.67
個人的相談先多さと頻度***	正規就業	196	9.34	3.86
	パート派遣	383	9.56	4.31
	専業主婦	284	8.24	4.11
個人相談先単純計**	正規就業	205	3.41	1.64
	パート派遣	398	3.45	1.74
	専業主婦	303	3.00	1.69
個人相談先職場以外 n.s.	正規就業	205	2.67	1.46
	パート派遣	398	2.81	1.55
	専業主婦	303	2.87	1.61
子どもを通わせる園や学校情報計 n.s.	正規就業	205	2.84	1.78
	パート派遣	398	2.99	1.69
	専業主婦	303	2.86	1.75
習いごと情報計*	正規就業	205	1.99	1.32
	パート派遣	398	2.17	1.35
	専業主婦	303	1.94	1.15
進路や職業情報計+	正規就業	205	2.04	1.34
	パート派遣	398	2.24	1.60
	専業主婦	303	2.02	1.29
子育て相談先計 n.s.	正規就業	205	3.02	1.63
	パート派遣	398	3.28	1.73
	専業主婦	303	3.23	1.60
子ども預け先計 n.s.	正規就業	205	2.32	1.28
	パート派遣	398	2.32	1.23
	専業主婦	303	2.31	1.20
子どもを通じた友人への情報・相談等計 ***	正規就業	205	2.16	1.56
	パート派遣	398	2.84	1.59
	専業主婦	303	2.63	1.58
子どもの勉強をみる(みた) n.s.	正規就業	197	2.74	0.90
	パート派遣	385	2.73	0.87
	専業主婦	291	2.81	0.94
子どもの友人関係についてよく知っている n.s.	正規就業	196	3.12	0.75
	パート派遣	384	3.14	0.67
	専業主婦	292	3.14	0.82

有意確率 + p<0.1, * p<0.05, ** p<0.01, ***p<0.001

した話は2006年のインタビューでも聞かれた。それはやはり早朝からの部活のお弁当作りや送り迎えや参観が、母親の就業形態から厳しく、子どもに部活を辞めるよう頼んだというものであった。その回答者は正規の看護職で、夫が単身赴任であった。子どもは自分で弁当を作るなどして部活は続けたそうだが、回答者にはやはり辛い記憶として残った。別の回答者は、PTA役員として活動に関わりたかったものの、日中のみに開催される会合だったために参加ができなかった経験を語った。彼女はひとり親であったが、PTAの参加についてはひとり親の要因よりは仕事をしている要因が大きかったと考えられる。また彼女は、子どものスポーツクラブや部活によっては親の関わりが大きくなることを想定し、その負担が少ないクラブ等を探す工夫をしていた(喜多2012)。

学校行事も含めて、家庭や子どもに専心して関わる母親を前提とするような社会関係や活動は、そうでない家庭に負担となり排他的に働く可能性がある。学校の時間外や休日に部活や地域のスポーツ活動などがあることは、近年、子どもの時間の過ごし方としても、教師の働き方としても問題を指摘されている。こうした活動への親の貢献もまた考えられるべきものであろう。親たちが部活などの子どもの活動に関わることで、それ自体は肯定されてしかるべきものかもしれないが、家族とは異なる人間関係を形成できる同輩集団での活動が親がかりになる問題もあれば、親が関われない子どもとの格差が生まれる可能性もある。それは共働き家庭の親とも共通の課題といえよう。仕事をもつ母親のPTA活動への関わり方の難しさは、喜多(2012)でも仕事をもつ母親を不利にする教育環境として言及した。社会関係資本には互酬性の規範がありそれが利他的に働くと言えようが、強制的な色彩を帯びる時、共助と言いながら自己責任的に機能し、格差拡大につながることも懸念される。

地域に関わる社会関係や活動、子ども関連の社会関係とは異なり、回答者個人の相談先や選挙・政治・社会問題等についての集会出席については、就業しているか専業主婦であるかの差で、専業主婦が不利な立場になっている。個人の相談先については、単純に質問項目に「職場や仕事関係の人」が入っているからでもあるが、質問項目には「その他の友人・知人」や「近所の人」「子どもを通じて知り合った人」も入っており、職場や仕事関係の人を除いた集計では有意差はなく、逆に言えば職場や仕事関係以外の相手を補完するほ

ど多くはなっていない。母親個人のことを考えれば、むしろ就業することは個人の相談先を増やし、社会参加の機会を拡大するとも考えられる(ただし、ここで差が生じるのは、正規就業者とそれ以外ではなく、パート就業者を含む就業者と専業主婦であるため、パートや自由業の性別分業的家庭が依然として一番有利と言えるかもしれない)。

Dさんが仕事場の年齢の近い人と相談ができる関係であること、Cさんが母親から就業を勧められたことがこれとの関連で想起される。

6. 子どものいない回答者を含めた比較

ここまでは子どものいる家庭で比較してきたが、更に未婚無子、離死別者無子、既婚無子家庭とも合わせて比較すると、また違った様相が見える。既婚有子と比較すれば社会関係や活動がやや少ないと思われたひとり親は、子どものいない家庭と比べると社会関係や活動が多いのである。大きな差はむしろ、子どもがいるかないか(いくつかの項目は結婚を経験したかどうか)の違いにある。

このように言うことによって、ひとり親が被る不利や排除を否定したい訳ではない。

そうではなく、相対的貧困と同様に、生活形態によって必要とされる財が異なるという観点で社会関係を見る必要があるのではないかということである。Cさんは、出産によってCさんの母親との関係がよくなったと述べ、「ちょっとした助けが必要ときいて、すごく多くあるんです。(中略)ああ、みんなで育ててもらってるんだなってすごく思います」と語る。それがCさんにとって幸福で意義がある経験となっているのは確かと思われるが、仮にCさんが出産せず遠方で就職していれば、そうした関係も支援も必要ないものだったとも考えられる。事例で紹介したひとり親の回答者に限らず、インタビュー協力者の大多数が、子どもが生まれてそれまでと全く異なる社会関係やソーシャル・サポートが必要になったと語っていた。就業者でも、そうでない場合でも、育児という新たな事態のために何らかの関係の模索や復活が要請されることが多かった。

更に2015～16年に実施したインタビューでは、夫が病気で倒れ介護が必要になった回答者と、障害をもつ子どもが生まれた回答者が、それぞれ公的なソーシャル・サポートと共に、それまでの社会関係や、新たな関係から情報や支援を得ていることを語っていた(石川他2018)。こうし

表8 婚姻・子ども有無別 社会関係・社会活動状況

		N	平均	標準偏差
自治会・PTA等活動参加度***	未婚無子	157	1.37	1.51
	離死別無子	22	2.09	2.60
	既婚無子	100	1.51	1.51
	既婚有子	646	2.10	1.93
	ひとり親	96	1.66	1.60
団体・組織加入数***	未婚無子	180	0.73	0.95
	離死別無子	25	0.92	1.32
	既婚無子	117	0.86	0.90
	既婚有子	794	1.63	1.15
	ひとり親	115	1.23	1.05
地縁の強さ(知り合い数と度合い)***	未婚無子	177	3.02	2.39
	離死別無子	24	3.88	2.94
	既婚無子	115	3.03	2.18
	既婚有子	781	4.85	2.51
	ひとり親	113	4.63	2.63
社会活動因子***	未婚無子	176	-0.08	0.71
	離死別無子	25	-0.10	0.76
	既婚無子	116	-0.25	0.69
	既婚有子	767	0.05	0.76
	ひとり親	109	0.09	0.71
政治参加因子*	未婚無子	176	0.10	0.91
	離死別無子	25	0.34	1.36
	既婚無子	116	0.04	0.80
	既婚有子	767	-0.04	0.65
	ひとり親	109	0.00	0.72
地域行事活動因子***	未婚無子	176	-0.38	0.49
	離死別無子	25	-0.10	0.69
	既婚無子	116	-0.24	0.48
	既婚有子	767	0.14	0.69
	ひとり親	109	-0.02	0.68
個人的相談先多さと頻度***	未婚無子	176	6.65	3.72
	離死別無子	23	6.13	4.10
	既婚無子	114	6.87	3.55
	既婚有子	755	9.16	4.23
	ひとり親	110	8.45	3.76
個人相談先職場以外***	未婚無子	180	1.84	1.32
	離死別無子	25	1.68	1.38
	既婚無子	117	2.01	1.22
	既婚有子	794	2.84	1.56
	ひとり親	115	2.49	1.48
個人相談先単純計***	未婚無子	180	2.39	1.60
	離死別無子	25	2.12	1.62
	既婚無子	117	2.45	1.44
	既婚有子	794	3.31	1.72
	ひとり親	115	3.11	1.65

有意確率 + p<0.1, * p<0.05, ** p<0.01, ***p<0.001

た社会関係や支援は、それがなければ回答者や家族の生活に支障が出るほど大きなものになっている。

このように考えるとき、O'Neill & Gidengil (2006) が、従来、女性たちが社会関係資本の蓄

積と維持に特に貢献していたと述べたパットナムを批判した含意に頷けるように思う。確かに、従来の地域の社会関係は、その時点の女性たちの生活や無償・有償労働を支えるものではあろうが、それはケアや養育のニーズと表裏一体のものとも言え、支援の希求と供給を、社会関係=人脈の豊かさにそのまま置きかえてはならないだろう。そのニーズは、健常で職業も平均的収入もある独身者にとっての社会関係とは異なるものと言えよう。そして、ケアや養育、地域に関わる社会関係が、必ずしも女性自身の政治参加や社会的地位の向上と結びつくものでないと O'Neil らは述べている。先ほどの調査の結果では、個人の相談先や集会への参加が、地域活動や子どもに関わる社会関係ではむしろ優位な専業主婦で低くなっていたことが思い起こされる。子どものいる家庭の社会関係を、意義のある豊かなものと捉える以上にサポートのニーズと捉え、ひとり親の困難をその供給の不足と考える必要があるだろう。

子育ての社会化も、介護・介助の社会化も、その必要性がかねてより指摘されてきた。子どものいる回答者の社会関係の多さはそのニーズを、また既婚有子回答者とひとり親回答者の差は、支援の調達を個人に委ねれば、社会的に不利な人々にそれが得にくいことを示すものと言えよう。家族の生活や家族内の関係を良好に保つためにも、家族にだけ頼らないようにすることは重要である。

性別分業的な関与を見直し、家族内では母親のみでなく他の人が、また家族外の人でもケアや子どもの教育に関わることが求められよう。育児サービスや介護支援でその方向が広がる一方、子どもに対する親の関与の必要と責任が強調される傾向もあることはその点で懸念がある。

※本研究の調査は、科研費 H24～27 年度基盤研究 (C) 課題番号 24530688, 及び H30 年度～基盤研究 (C) 課題番号 18K02030 の助成で実施された。調査にご協力いただいた方々に、深くお礼申し上げる次第である。

[注]

- (1) 「母親の社会関係資本が子の教育格差に与える影響についての実証研究」(H24～27 年度基盤研究 (C) 課題番号 24530688)
- (2) 「社会的格差を踏まえた社会関係資本の効果に関する具体的検討: ジェンダー, 教育, 家族」(H30 年度～基盤研究 (C) 課題番号 18K02030)

〔文献〕

- 赤石千衣子, 2014, 『ひとり親家庭』岩波書店.
- Coleman, J. S. 1988, "Social Capital in the Creation of Human Capital", *American Journal of Sociology*, 94 : 95-121. (=2006, 金光淳訳「人的資本の形成における社会関係資本」野沢慎司編監訳『リーディングスネットワーク論——家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房 : 205-238).
- Granovetter, M. S., 1973, "The strength of weak Ties," *American Journal of Sociology*, 78 : 1360-1380 (=2006, 大岡栄美訳「弱い紐帯の強さ」野沢慎司編監訳・前掲書 : 123-158).
- 平塚眞樹, 2006, 「移行システム分解過程における能力観の転換と社会関係資本——「質の高い教育」の平等な保障をどう構想するか?」『教育學研究』73(4) : 391-402.
- 石川由香里・杉原名穂子・喜多加実代・中西祐子, 2011, 『格差社会を生きる家族』有信堂.
- , 2018, 『子育て世代のソーシャル・キャピタル』有信堂.
- 神原文子, 2007, 「ひとり親家族と社会的排除」『家族社会学研究』18(2) : 11-24.
- , 2020, 『子づれシングルの社会学 : 貧困・被差別・生きづらさ』晃洋書房.
- 喜多加実代, 2012, 「家庭教育への要請と母親の就業」宮島喬・杉原名穂子・本田量久編『公正な社会とは』人文書院.
- O'Neill, B. and E. Gidengil, 2006, *Gender and Social Capital*, Routledge.
- 大岡栄美, 2007, 「著者紹介・文献解題——マーク・グラノヴェッター」野沢慎司編監訳・前掲書 : 155-158.
- Putnam R. D., 2000, *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*, Simon & Schuster. (=2006, 柴内康文訳『孤独なボウリングーコミュニティの崩壊と再生』柏書房)
- 志水宏吉, 2014, 『「つながり格差」が学力格差を生む』亜紀書房.
- 杉原名穂子, 2018, 「社会関係資本と家族要因の関連と効果——ジェンダー論の視点から」『社会情報学』6(3) : 19-33.
- 安田尚道・塚本成美, 2009, 『社会的排除と企業の役割 : 母子世帯問題の本質』同友館.
- 山崎貴子, 2007, 「<書評>ジェンダーと社会関係資本」『教育・社会・文化 : 研究紀要』(11) : 61-9.
- 労働政策研究・研修機構, 2019, 『子どものいる世帯の生活状況および保護者の就業に関する調査 : 子育て世帯全国調査』労働政策研究・研修機構.

